

愛は不思議なもの

小川未明

青空文庫

生活せいかつに差別さべつのあるのは、ひとり、幾いくまん万まんの人にんげん間の住すんでい
 る都会とかいばかりではありません。田舎いなかにおいても同じおなじであります。そ
 の村むらは、平和へいわな村むらでありましたけれど、そこに住すんでいる人々ひとびと
 は、みんな幸福こうふくな身みの上うえというわけではありませんでした。
 おしずは、小ちいさい時じぶん分に、父ちちはは母ははに死しに別わかれて、叔母おばの家うちで育そだ
 てられた孤児みなしごでありました。そして、十七、八のころ、村むらのあ
 る家うちに奉公ほうこうしたのであります。その家うちの人ひとたちは、情なさけある人ひと
 とびと
 々とでした。

「おしずは、両親ふたおやも、兄きょうだい妹いもないのだから、かわいがつて
 やらなければならぬ。」といつて、そこの人ひとたちは、いたわつて

くれました。

彼女のよ 彼女は、四つになる坊ちゃんぼつの守りもをしたり、家の仕事うち しごとをて

つだったりして、毎日まいにちつつまじやかに働はたらいていました。

村むらは、小高こたかいところになりました。春はるから、夏なつにかけて、養ようさ

蚕いそがに忙いそがしく、秋あきに、また、果物くだものが美うつくしく圃たんぼに実みのりました。大おお

きな池いけがあつて、池いけのまわりは、しらかばの林はやしでありました。暖あたた

かになるころから、寒さむくなるころまで、いろいろの小鳥こどりが、林はやしに

きて、いい声こえでさえずっていました。また、池いけからは、ふもとの

村むら々の田たへかける水みずが流ながれていました。

薬くすり売りや、そのほかの行商ぎょうしょう人が、たまたまこの村むらにや

つてきますと、

「いい村だな。」といつて、ほめました。

そのはずであります。うつそうと、青葉あおばのしげった間あいだから、白しろ壁らかべの倉くらが見みえたり、楽たのしそうに少しょうじよ女むらたちの歌うたうくわつみ唄うたが聞きこえたりして、だれでも平和へいわな村むらだと思おもつたからであります。ことに、収しゆうかく穫とくのすむ秋あきになると、空そらの色いろは冴さえて、木き々の葉はが色いろづき、遠とおくのながめもはつきりとして、ひとしおであります。した。ちようど、そのころ、お祭まつりがあります。一年ねんに、一度ども待またれた休やすみ日びですから、娘むすめたちは、着きかぎつて、きやつきやつといつて、友ともだちの家うちなどを歩あるきまわりました。おしずも、いちばんいい着きもの物ものに被きかかえて、お小こづか使かい銭せんをもらつて、坊ぼつちゃんをつれて、外そとへ出でました。けれど、彼かのじよ女めばかりは、こんなときに、かえつ

て、なんとなくさびびりそうでありました。もし、彼女にも、親
があつたら、ほかの娘たちのように、はしやいで遊ぶことができ
たでしょう。

ほんとうをいえば、おしずには、お祭りなどのない、平常のほ
うがよかつたのでした。

「おしずさん、活動を見にいった？」

ある日のこと、友だちが、外に坊ちゃんと立っている、彼女
にたずねました。

「いいえ。」と、おしずは、頭を振りました。

「日曜は、昼間もあるし、それに、こんどは、おもしろいとい
う話だから、いつてみない？」

と
友だちは、無邪むじゃき気に、こういいましたが、彼女かのじよは、自由じゆうでな
い、自分じぶんの体からだを考かんがえずにいられませんでした。

「私わたし、坊ぼっちゃんがあるから、どこへもいかれないの。」と、坊ぼっち
やんを見守みまもりながら、答こたえました。

ちようど、このとき、トテトーといって、かなたの街道かいどうを、
二里りばかり隔へだたる町まちの方ほうへゆく、馬車ばしやのらっぱの音おとが聞きこえまし
た。娘むすめたちはじつと、その方ほうをながめたのです。秋あきの日ひを受けて、
あかあかとして、松まつの並木なみきが見みえたのでありました。

こんなふうには、おしずは、けっして、ほかの子供こどものように、幸こ
福ふくであつたといふことはできません。しかし、主人しゅじんが、思おもい
やりが深ふかかつたから、貧まずしい家うちの子供こどもらよりは、ときには、しあ

わせのこともありました。それよりも、彼女の幸福は、ほんとうに坊ちゃんをかわいがっていたことです。

「坊ちゃん、あれ、なんの音でしょう？」

こういつて、自分も真剣になつて、耳をかたむけながら、遠くの音を聞いたりしました。

「坊ちゃん、また、あんな雲が出ましたよ。」といつて、二人で、空をながめたりしました。

「さあ、坊ちゃん、私に、おんぶしましょう。ねえやは、坊ちゃんをおんぶして、どつかへいつて、しまいましょか。」

彼女は、じょうだんをいつて、坊ちゃんに、ほおずりをしました。

人が見ていようと、見ていなかろうと、おしずは、よく坊ちやんのめんどうをみて、心から、かわいがっていました。

「雪や、こんこん、あられや、こんこん。」

子供たちが、寒い風の吹く中を口々に、こんなことをいって、かけまわりました。いつしか、国境の高い山々のとがった頂は、銀の冠をかぶったように雪がきました。もう、この村の水が凍るのも間近のことです。

ちらちらと雪が降っては消え、消えてはまた降るといふようなことが重なりました。その後で寒い寒い、たたけば、空気も鳴りそうな冬となりました。

ある朝のことです。小さな子供たちは、一、二丁離れた、池の

みずこお
水が凍ったといつて、その方へ、足音をたててかけてゆきまし
た。

「もう、きつねが渡ったよ。」

「きつねが渡ったから、乗ったついでいいだろう。」

こども
子供たちは、小石を拾って、池の面に投げてみました。なまり
いろ
色にすこしのすきまもなく、張りつめた氷は、金属のような音
をたてて、石は、どこまでも、どこまでもうなりながら、ころが
つてゆきました。

こども
子供たちは、また、どこからか竹ざおを持ってきて、コツ、コ
こおりおもて
ツと氷の面をつつきました。氷は、堅くて、いくら突いても、突
いても、跡すらつきませんでした。もう、その上に乗つてもだい

じようぶだろうと、一人乗り、二人乗りしました。そして、そこにいた四、五人の子供は、みんな乗つて、これから、毎日、こうして、遊ばれると思うと、新しい世界を征服したように、喜びの声をあげました。

おしずは、さつきまで、家の前に、子供たちと遊んでいた坊ちやんが見えなくなつたので、どこへいったのだろうと探しました。そして、みんな池の方へいったと聞くと、あわててその方へやってきました。

子供たちの遊んでいる声が、かすかに、あちらでしていました。彼女は、びつくりして、

「もう、氷すべりをしているのでないかしらん？ 坊ちゃんもい

つしよに？」と思うと、胸がどきどきとしました。

池の見たされるところまでくると、はたして、白い氷の原の上に、子供たちが黒くなって遊んでいました。

「坊ちゃん！ 坊ちゃん。」と、叫びながら、彼女は、きちがいのように、走りました。なぜなら、「もう、池を渡つても、だいじようぶだ。」といううわさを、まだ、だれからも聞かなかつたからです。

彼女の叫び声は、冷たい空気の中へ、むなしく消えました。

そして、ようやく、あちらのしらかばの林から昇りかけた、朝日の光が、鏡のような氷の面をぼうつと染めるとき、小さな子供の影が、岸の近くから離れて、もつと、もつと、あちらへ飛んでゆ

くのを見ました。

「坊ちやあん！」と、彼女は、わめきながら、いつのまにか、自分も、氷の上を駆けていました。そして、だんだん、その小さな黒い影に近づいた時分、彼女の体の重みを支えるほど、まだ厚くなつていかなかったとみえて、ふいに、氷は破れて深い水中に落ち込んでしまいました。

幾年かたつて、坊ちやんであつた子が、いつしか、少年となりました。そして、両親や、また、村の人々から、自分の守りであつた、おしずの話聞いて、いたく心を動かしました。「ほんとうに、かわいそうだな。そんなにまでかわいがつてくれたのかしらん。どんな顔をしていたろう……。」

少年しょうねんは、空想くうそうしました。冬の寒さむい晩ばんに、空そらにきらきら輝かがや
 く星ほしを見ると、その中なかに、おしずの靈魂れいこんが星ほしとなつてまじつて
 いて、じつとこちらを見みているのでないかと思おもいました。ほかの
 子供こどもたちが、氷こおりすべりをおもしろがつてしてきますなかに、ひと
 りこの少年しょうねんのみは、沈しずみがちにすべつていました。
 「おしずの落おちたのは、この辺へんだつたらうか？」
 哀あわれな少女しょうじよが、小ちいさな自分じぶんの後あとを追おつてきて、氷こおりが破われて
 落おちた有あり様さまを目めに描えがいたのでした。また、夏なつの雨あめの晴はれた後あとな
 どに、この池いけのあたりを散歩さんぽしますと、緑みどりの葉はが、雲くものようにし
 げつて、静しずかな水みずの上うえに、影かげを映うつしています。少年しょうねんは、じつ
 と、たたずんで水みずの上うえを見みつめていました。すると、このとき、

どこからともなく、マンドリンの音がきこえてきたのでした。

「あ、マンドリンの音だ。どこからするのだらう？」

よく、旅から、やってくる芸人が、月琴や、バイオリンや、

尺八などを鳴らして、村にはいつてくることがありました。少年

年は、やはりそんなものがきたのであらうと思いましたが、ベ

つに、あたりには、人の影も見えませんでした。マンドリンの音

は、近く、また遠く、きこえたかと思うと、しばらくして、水の

中に沈んでいったように聞こえなくなってしまうました。

少年は、家へ帰ってから、今日、池のほとりでマンドリン

の音を聞いたが、芸人でもきたのかしらんと話しました。する

と、お母さんが、顔の色を変えて、

「これからおまえは、池の辺へ、一人でいつてはいけません。」
といわれました。

「なぜですか、お母さん？」

「おしずが、おまえを呼ぶのです。」

それは、家にあつた、マンドリンを鳴らして、おしずがおまえのお守りをしたというのでありました。

「物置を開けてごらんさい、マンドリンがあるから。その古いマンドリンを鳴らして、おまえが泣くと、よく唄などを歌つてあやしたものだ……。」と、お母さんは、いわれました。

少年は、そんなこともあつたのかと思ひました。

それから、また幾年かたつたのであります。少年は、い

つのままにか、りっぱな、せいねんちようこくか青年彫刻家となっていました。そしてもう田舎いなかにいで、とかい都会に出てで生活せいかつしていました。

十七、八の美しい娘むすめさんたちを見ると、彼は、おしずのことを考え出かんがさずにはいられませんでした。なぜなら、おしずはちやうどそのころに、守りもをしていて、自分じぶんを救すくおうとして死しんだからです。しかも、孤児こじであつた、彼女かのじよは、けつして、幸福こうふくとはいえませんでした。それを思うと、青年せいねんは美しい人ひとを見ても心こころをひかれることがなかつたのです。

「おしずの顔かおを一度、夢ゆめになりと見みたいものだ。そうしたら、その顔かおを製せい作さくするの……。」と、思おもっていました。

話はなしに聞きいても、おしずは、そんなに美うつくしい女おんなではなかつたとい

うことです。けれど、彼かれには、やさしい、美しいうつく、そして、情けなさ深いぶか、女おんなに思われましおもた。他たのどんな美しい女おんなとも、それはくらべものにならないほど、理想りそうの顔かおに思われましおもた。彼かれは空想くうそうするさような顔かおを探さがそうとしましたけれど、モデルになるおんなような女おんなはなかなか見当みあたりませせんでした。彼かれは、せめても、おしずにお守もりをされた、当時とうじの四つばかりの自分じぶんの顔かおを写真しゃしんによつて、作つくつてみようと思おもいたちました。それを作つくることは、彼女かのじよへの心こころづくしであるようにすら考かんがえられたからです。

彼かれは、おしずの死しんだ、寒さむい冬ふゆのころから、その顔かおの製作せいさくにかかりました。こんな顔かおをして自分じぶんは、氷こおりの上うえに遊あそんでいたのだと、思おもいたかつたのでした。そして、この製作せいさくはようやく、春はる

になつてからできあがりしました。その仕事の終わつた日のこと
 す。彼は、アトリエで、疲れてうとうとといすにもたれて眠つて
 いました。春の月がほんのりと窓のすりガラスを照らしてしま
 した。

どこからともなく、マンドリンの音が、聞こえたのです。彼は、
 驚いて、目をさました。すると、国から持つてきて、アトリ
 エの壁にかけてあつたマンドリンを手に持つて、十七、八のみす
 ぼらしいふうをした田舎娘が、それを鳴らしながら、自分の製
 作した彫刻の前に立つて、その顔を見つめているのです。
 青年は、はつとしました。自分は、夢を見ているのでないかと、
 大きく目をみはりました。髪の毛のこわれた、短い着物をきた田舎

娘すめは、まぼろしでも、夢ゆめでもないように、はつきりと立たつていたのです。

彼かれは、あまりのことに、いすから起おきて、声こえをたてました。すると、たちまち、その姿すがたはどこへともなく消きえてしまいました。

「やはり、夢ゆめかしらん。いやこんなに、目めを開あけているのだから、夢ゆめじゃない。」

彼かれは、へやの中なかを見みまわしますと、古ふるい、糸いとの切きれた、マンドリンは、ほこりのかかったまま壁かべにかかっています。そして、月つきの光ひかりは、おぼろに、窓まどの外そとを照てらしていました。彼かれは、その窓まどを開あけました。春はるの夜よは、静しずかに更ふけていました。どこからともなく、花はなの香かおりがただよってきただけです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 7」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「未明童話集 5」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

※表題は底本では、「愛《あい》は不思議《ふしぎ》なもの」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

愛は不思議なもの

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>